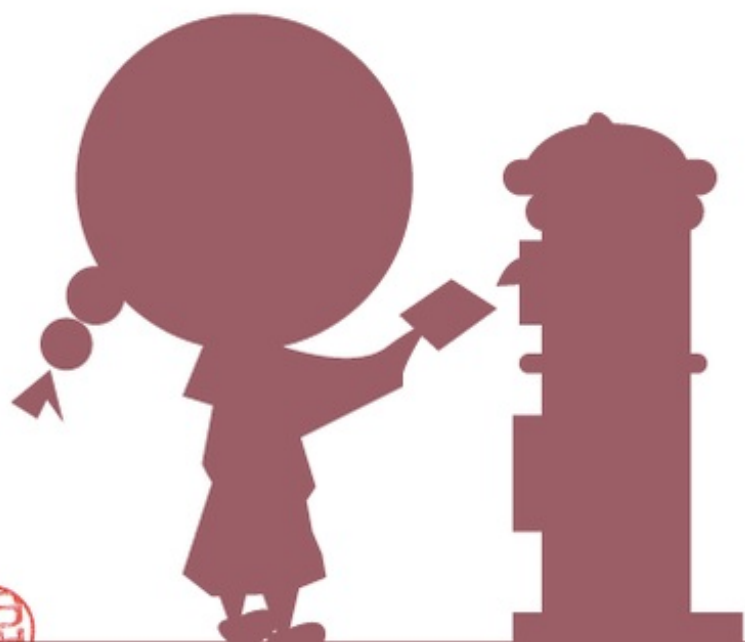




郵便社務はかき

往復

# 往復葉書



食卓で、孫の莉奈がうどんをすすっている。涙と鼻水もすすりあげながら。登校前、グロスだ、マスカラだと騒いでいた子がと、妙子はつい笑ってしまう。今は高二になっているが、忙しい娘夫婦に代わって保育園に送り迎えしていた頃「帰るー」と泣き叫んでいた時と同じ顔だ。妙子は、ゆるんだ口元を見つかると文句を言われそう、無理に顔を窓の方に向けた。庭には、取る人がいなくなって、すっかり茶色くなったカリンがゆれている。莉奈に目をもどすと、左手にスマホをにぎりしめたまま、それでもうどんをすすっている。今日から期末テストだそうで、早く帰って来たのだ。

「どうしたの？おばあちゃんでも相談にのれる？」

妙子は、そっとティッシュの箱を出して、声をかけた。

「明日香にラインをブロックされた。部活の友達からもみんなブロックされたんだよ。テニス部行けない！学校行けない」

そう言うと、莉奈はやっと鼻をかんだ。原因は、そのスマホのようだ。ねばりにねばって両親を折れさせ、先日やっと手に入れたものだ。でも妙子には何のことか全く分からない。

「ブロック？コンクリートの？」

「おばあちゃん、ちがうよ！私のラインが拒否されたの」

「けんかでもしたの？」

「返信忘れてたんだよ。新しくゲットしたスタンプ送ってきたんだけど」

「スタンプ？はんこ屋さんから送られてくるの？」

妙子は、何とか理解しようと頭の中をグルグルさせながら言ったけれど、莉奈を苛立たせるばかりだ。

「あ～～もう、携帯も持ったこともないおばあちゃんにはわからないよ。スタンプはネットで買うの、ネットっていうのは、うわ～もう！このスマホの中で買うの。スタンプ送られたら『かわいいね』とか返信するのがマナーなの。でもテスト勉強中だったし、そのままにしてたんだ」

「次の日、学校で会うんでしょ、その時言えればいいじゃない、ごめんねって」

「それとはまた違うんだよ、すぐ返事しなきゃダメなの」

「それじゃあ、返事の返事のまた返事で、きりがいいじゃない」

「おばあちゃんなんか分からないのよ。わたしハブられたんだ。今日部活で集まるって知らなかった。連絡なかったもん。明日香は部長だから」

妙子は、もう返す言葉も見つからなくなって、ゆっくり立ち上がると廊下に出た。カリンが何だかさびしそうに見える。ついさっきまで自分の居間で三か月前に亡くなった夫の遺品整理をしていたのだ。古びた文箱を持って戻って来ると、二枚の葉書を取り出して莉奈の前に置いた。きよとんとこちらを見た莉奈に、ちょっとはにかんで言った。

「ちょっと見てくれる？これね、往復葉書、知ってる？」

そう言われて莉奈は、首をかしげた。

「切り離して相手に、返信用のを送るの。クラス会の案内とかに今も使われてるよ。これね、昔おばあちゃんが出した葉書なの。たった今出てきたの。てっきり捨てたと思ってたから、びっくりしたわ」

妙子は、ぼそぼそと言いながら、黄ばんだ葉書をなでた。莉奈は、しょうがないなあとも言いたげに隅をつまんだ。

「まあ昔々のことだけどね、おばあちゃんがちょうど莉奈とおなじ歳だったよ。おじいちゃんとは、幼馴染みでね、まあずっと憧れていたの。就職で東京へ行ってしまってさびしかった。電話も会社の寮の管理人さんの所にしかなかったし、連絡は手紙だけだったの」

莉奈は、涙のたまった目を大きく見開くと、むっとして、声をあげた。

「何？今？私がへこんでる今、おばあちゃんの恋バナ！」

妙子は、しわしわの頬をほんの少しほわっと染めながら、続けて言った。

「手紙ってね、待ってる間がながいの。届くだけでも三日くらいかかるのよ。それも筆不精の人相手だったから、何カ月も待ってるの」

「信じられない。私だったら我慢できないよ」

「でもね、その待ってる間、ず〜と相手のこと考えててね。その時間が幸せだったかな」

「昭和の人はのんびりしてたんだよ」

「それもあるかもしれないけど、莉奈、大切な人は待てるものよ」

「今だと絶交間違いなしだね。でも私も、ちょっとせっかちすぎるかなあって思うこともある」

「人と人って時間をかけて育てなきゃあ」



郵便社荷はかき

神 信

東京都板橋区蓮根

二ノ十六ノ三

喜栄寮十一号室

緒方 勝一様

兵庫県加古郡稲美町天満

三ノ四

山本妙子

お元気ですか？お仕事お忙しいのでしょね。

私は今月末の文化祭の準備で

いつも遅くなり両親を心配させています。

それでも勝一さんへお手紙を書きたくなり自分で困っています。

ご迷惑だろなあって。

それで、いいことを思いつきました。

往復葉書です。

これだとちよつと書いて投函するだけだからなんて

勝手に考えました。

我儘な妙子をお許し下さいね。

風が冷たくなってきました。

どうかお体大切にお過ごしくださいね。

昭和三十五年十一月十日

勝一様

妙子



郵便はがき

兵庫県加古郡稲美町天満

三ノ四

山本妙子様

東京都板橋区蓮根

二ノ十六ノ三

喜栄寮11号室

緒方 勝一

とても  
僕は 元気

ちよつと疲れ気味  
体調不良

今度の帰省は お正月休み

未定

ものすごく

その時

逢いたい

考え中

逢いたくない

妙子のことを

よく考える

あまり考えない

忙しいので忘れてる

ひとこと ( 筆不精の僕をどうか許して下さい。初詣一緒に行きましよう。 )

大好きな妙子さまへ

勝一 拝

追伸

先になると思いますが、どうか結婚して下さい

そう叫んだ莉奈は、古びた葉書を高く持ち上げて立ち上がった。

「莉奈にもそういう人が現れると分かるよ、もしかしてもう？」

涙をぬぐった莉奈は、つるつるの頬をほわっと染めた。それから、「えへんっ」と咳払いすると

「明日香に私も往復葉書出してみようかな。怒ってますか？①なんともない②おこ③激おこぷんぶん丸 とかね、葉書なんて書いたことないもん、おばあちゃん教えて」

そう言われた妙子は、確かあの引き出しに葉書があったはずだと思いながら、よっこらしよと立ちあがった。その時、スマホからリンという音がした。

「あっ、明日香だ、解除してくれたんだ。あはっ」

そう言うと、莉奈は、夢中でスマホにかじりついた。妙子は、そんな莉奈の背中を、やれやれというように見ると、ほっとため息をついて、また廊下へ出た。

「今年はすっかり遅くなってしまったけれど、明日はあなたの大好きだったカリン酒を作るわ」

そう独りつぶやくと、妙子は、文箱を胸に、黄ばんだカリンをそっと見つめた。





郵便はがき

往復葉書

